

レバノンでのパレスチナ人・シリア人 支援活動

4年目になったシリア内戦ではすでに20万人の犠牲者、800万人の国内避難民、そして300万人の難民が周辺諸国に出ています。なかでも120万人以上が流入したレバノンでは人口の4人に1人が難民という状況になりました。またシリアからの難民の10%は再難民となったパレスチナ人で、私たちはこの人たちへの支援も続けています。



ワーベルキャンプで

空腹の子どもたち

シリア国境に近いベカー県はシリアからの避難民の流入率が最も高く、避難生活が長期化するなかで難民たちは厳しい生活を続けています。世界遺産バールベック神殿から近いワーベルというパレスチナ難民キャンプには元からの住民である800世帯に加えて、シリアから流入してきた700世帯が居住しています。この地域での雇用は農業や建設業の日雇労働しかないのに、冬は1メートルを越える積雪のため日雇いもなくなり、多くの人々が国連やNGOの支援物資や海外在住の親戚からの送金などで生計を立てています。

国連によるとシリアから逃れてきたパレスチナ人世帯の45%が一日1回しか食事を摂っていない状況にあり、91%の子どもは一日に必要な最低限の食事量を口にしていないと言われています。ワーベルもその例外ではなく、現地パートナー団体「子どもの家」は「子どもたちは空腹と闘っている。教育も大事ですが、まずは机につくための生きる糧が必要です」と訴えています。

私たちの支援する補習クラスが始まる前、ポテトチップスを食べている子どもを見かけることがあります。「朝ごはん食べた？」と聞くと、ポテトチップスを指さし「これが朝ごはん」と答えます。ポテトチップスは1袋15円ほどで、サンドウィッチの4分の1で買えます。子どもたちはいわゆる「ジャンクフード」でお腹を満

たしているのです。そんな子どもたちが友だちにチップスを一枚ずつ振る舞い、私や補習指導員にも「どうぞ」と差し出してくれます。食事も十分に口にしていない子どもたちですが、友だちも同じような境遇にあると理解しているため、ひとりでチップスの袋を抱えて食べるという行動は見かけません。

レバノンは先進国並みに物価が高く、米やパスタ、野菜、肉といった食材を購入し調理するにはそれなりの費用がかかります。特に2011年のシリア危機以降、野菜の価格は高騰して、以前はトマト1kgが40円だったのが、現在では100円。季節や地域によっては160円もします。難民は安価な缶詰やパンにザアタル（フリカケ）といった簡単な食事で済ませることが多く、温かい食事を口にできる機会が非常に限られています。

当会では4つのキャンプで補習クラスや幼稚園の子どもたちに週に2回給食を提供しています。給食の日には出席率が上がるほど、子どもたちは給食を楽しみに補習に通っています。野菜や果物を口にできる機会が少ない子どもが多いため、キュウリやトマト、バナナやオレンジ、ヨーグルトや牛乳も提供しています。子どもたちはキュウリをカリカリとおいしそうに丸かじりし

給食は子どもたちの一番の楽しみ



奥の少女は兄弟に持って帰るために給食に手をつけていない



てあつという間に完食してしまいます。

「お肉やお魚を口にできる機会などめったにない」という子どもたちに、ワーベルでは「スフィーハ」と呼ばれる郷土料理のミートピザを出しました。手をつけずにいる4年生の女の子が「兄弟に持って帰ってもいい？」と聞きます。「もちろん」と答えるとその女の子だけでなく周りに座っていた子どもたちが数人、お皿を抱えて家に急いで帰って行きました。温かい肉入りの食事を食べる機会などほとんどない中、目の前のご馳走を家で待っている兄弟にも食べさせたいと考える子どもたち。他者の気持ちを感じることができ、自然に食べ物を分かち合う子どもたちから学ぶことは多いです。

シリア難民の生活

キャンプに隣接する墓地に45世帯のパレスチナ系シリア難民の家族が暮らしています。地元の団体がシリア難民の家族に提供している無料仮設住宅です。倉庫を木の板で1部屋5畳ほどに仕切っているだけで、トイレや炊事場は20世帯に一つ。ビニールシートで覆われたトタン屋根からも雪が入り大変厳しい寒さです。「子どもの家」など地元のNGOが暖房用のストーブや燃料を配布し寒さだけは何とかしのいでいますが、支援食糧を売ってでも燃料費に回していると住民が話してくれました。

5歳になる双子の男の子と、聴覚障がい疑いのある4歳の娘がいる女性に話を聞きました。夫はシリアで行方不明になっており、2年半ほど前にシリアのヤルムーク（パレスチナ難民）キャンプから夫の親兄弟と一緒に避難してきたそうです。「夏は塗装の仕事をしてわずかな収入を得ていたが、冬は仕事なんて見つからない」と話す夫の弟は寒さの中、Tシャツに薄手ズボンで部屋の隅にうずくまり、まだ10代に見える妹も目の下に大きなクマをつくって毛布にくるまり横になっていました。双子はキャンプの幼稚園にこれから通

うため、わずかなチーズが挟まれたパンを食べているところでした。台所もなく調理器具も食材も不足しているため調理する機会は少ないそうで、子どもたちは冷たいパンをストーブにのせて少しでも美味しくなるよう工夫しています。

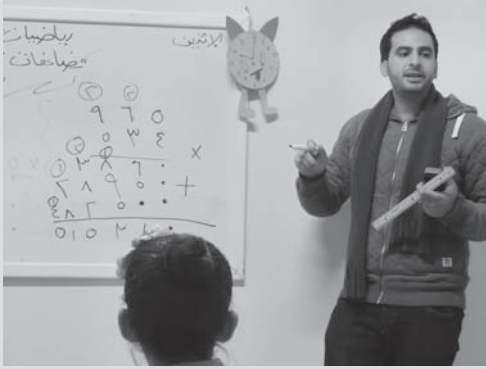
2年半以上もこのような生活を続けているというこの家族。避難当初は「すぐに帰れるから」と考えたそうですが、夫の行方も分からぬまま帰還の見通しもなく時間だけが過ぎていきます。「ヤルムークキャンプは大きく破壊されたため、戻ったとしても家が残っているのか、どこに行ったらよいか分かりません。だから寝るところや食糧や燃料を支援してくれる団体があって最低限の生活ができている以上、ここに留まるしかありません。」とお母さん。給食提供の他、当会ではワーベル周辺のシリアから避難してきた人たちへの食料配布を予算が許す限り時々実施しています。

脱出

「今日は、〇〇ちゃん一家が無事フランスに到着した」、「〇〇くん一家はリビアで（イタリア行の）船を待っているそう」という海外移住の話をよく耳にし、元からの住民さえ口をそろえて「ここには未来がない」といいます。シリア内戦はすでに4年目に入り、今のシリアの状況を前に「帰還は難しいのでは……」と絶望的に考え出している人は少なくありません。支援がいつまで続くか分からないため、多くのシリア難民家



ワーベルの避難民家族



カリスマ講師ムハンマドさん



学校に行っていない10代の少女たちを集めて料理や文化を教える活動も



各センターではラグ織り講習をして母親たちを心理面でもサポート。日本人スタッフが紹介した

族が国境を超えトルコやリビアから欧州へ海を渡ります。「より良い未来」を手にするための命を懸けた難民たちの決断です。定員をはるかに超える人々が乗った小舟が、イタリアを目の前に沈没してしまったなど悲惨な結末に至ることは少なくありません。ある家族は全員でエジプトに行き、そこからイタリアへと渡る予定でした。しかし、エジプトで地中海の海原を目前にして、怖くなってレバノンに引き返してきたといいます。そのときその場所で、どちらに向かうかあるいは留まるか、生命を左右する決断に迫られ続ける難民の生活。

ワーベル「子どもの家」センターのスタッフだったムハンマドさんも移住を決断した一人です。リズムカルな口調で子どもたちの注意を引き、一人ひとりの子どもに愛情をもって接していたカリスマ数学講師ムハンマド。算数嫌いの子どもがいなくても過言ではないくらい子どもたちはムハンマドさんが大好きです。7歳の時に父を亡くし、海外の支援を受けて大学を卒業した後、2006年から子どもたちに算数とコンピュータの使い方を教えてきました。大学卒業当初は、豊かな生活を夢見てドバイに渡りたいと計画していたのですが、パレスチナ人であるためビザ取得は容易ではなく、計画を断念せざるを得ない状況のときに、補習講師の仕事に出会いました。はじめは子どもたちが何を考えているのか、どうして欲しいのか分からず苦戦したそうですが、時間が経つにつれ心が通じるようになったといいます。最近では肉親を失いシリアから避難してきた子どもも少なくない中、ムハンマドさんは時には父となり、兄となる必要性を感じたそうです。しかし補習の講師と家庭教師の収入では家族を養うことはできないのです。ビザがようやく取れた1月にムハンマドさんはスウェーデンに出発しました。

踏みとどまる人たち

一人ひとりが「より良い未来」のためにそれぞれの

決断をしています。「今いる場所で精一杯挑戦する」という選択をしている人もいます。ワーベルのセンター長のアジザさんです。経費と睨めっこしながら給食のメニューを考えるなど、子どもたちの笑顔を絶やさないように日々格闘しているアジザさん。会うたびに「ここには食べ物がない、仕事がない、未来がない」と嘆いておられますが、「それでも明日は来る。人生は途切れなく続いて行くのよ。それなら泣いていても仕方がないので笑ってなきゃ」と、いつもパワー全開でプラスのエネルギーをキャンプ中に与えています。厳しい状況の中で前向きな姿勢を保つことは容易ではありませんが、彼女の気持ちが子どもたちにも周りの大人たちにも伝わり、ワーベルセンターの居心地の良さを造っているのだと感じます。

「すぐに帰れるから」と住み慣れた故郷を後にしたのはシリア難民だけではありません。「いつかは……」と待ち続けながら状況が一向に改善せず、70年近い時が流れたのがパレスチナ難民です。アジザさんのお母さんは14歳の時「1週間で戻ってくるから」とハイファ(現在のイスラエル北部の都市)を後にしました。「1週間どころか、もう67年になる。私の人生の大半はここワーベルキャンプにある。結婚も出産も、子育ても。私はここで歳を重ねた」。

今でも毎日寝る前には、ハイファでの幼年時代を思い出し「一度でいいから帰りたい。」と口にするそうです。レバノンは岐阜県ほどの大きさで、イスラエルとの南部国境へはワーベルからでも数時間で行くことができます。それほど遠くない故郷なのですが、越えることができない国境が目の前に立ちはだかり、アジザさんのお母さんは67年間その境界を超えることができません。



アジザさんとお母さん

● ベイルート国際マラソン

2014年も、ベイルートマラソンにブルジバラジネキャンプの子ども33人が参加しました。南部に住むシードラちゃんも二回目の1キロマラソンを完走しました。ブルジバラジネの子どもたちは5キロマラソンを予想もしていなかったすごいスピードでゴール。グループ同士で助けあい、転んだ友達を助け起こしたり、手をつないだりしながら、ゴールまで駆け抜けました。父親をシリアで失い「レバノンに避難してきてこんな目にあうなら、お父さんと一緒に死んでしまえばよかった」と作文に書いたマラックちゃんもゴールイン。「初めて自分のことを勇敢だと思った」と語ってくれました。(この様子はNHKのドキュメンタリー「走れ 泣くのはやめて 難民キャンプのシリア人」として年末に数回放映されました。)



シードラちゃんとバットールちゃん

● 子どもたちのカウンセリング

現地パートナーのファミリー・ガイダンスセンター（以下、FGC）は、子どもの精神科とカウンセリングのための専門機関です。国連によると、シリアから避難してきたパレスチナ人難民世帯の92パーセントにPTSD症状のある家族構成員がいる、さらに60パーセントの世帯に慢性疾患を抱えた患者がいます。私たちが支援をしている南部サイダにあるFGCセンターは、レバノン最大のパレスチナ難民キャンプであるアイネヘルウェのそばにあります。レバノン軍に出入りが厳重に管理されているアイネヘルウェですが、ビザの切れてしまっ

たシリア難民はキャンプから出ることもできず、またキャンプ内では発砲事件も起こり人々は大きなストレスに晒されています。

サイダ周辺には子どものカウンセリング機関がないため、毎日多くの家族がFGCセンターに登録をしています。精神科医、臨床心理士など専門家によるカウンセリングとサポートを求め予約リストは常時100人を超えています。

2012年末にシリアから避難してきたアヤットちゃん（8歳）は、目前で父親を火あぶりにして殺されるという壮絶な体験をして以来、母親以外とは話せなくなりました。どこに行くにも母親と一緒にないと不安なため通学もできません。内戦のためにシリアでも幼稚園に通っていなかったため集団教育を受けたことがないのです。8人兄弟の中でも末っ子の彼女が最もPTSD症状が強いと診断されました。2013年夏より開始したカウンセリングでは臨床心理士とお母さんが相談し、「1人で小学校に通えるようになる」ことが目標になりました。

アヤットちゃんは週1回のカウンセリングを受け、ほかの日もセンターに来て、塗り絵や知育ゲーム等の活動に参加するようになりました。次第に他の子どもたちとも仲良くなり、悪夢にうなされて毎日泣いていた症状も徐々に軽減していきました。

一年半カウンセリングを続けた結果、アヤットちゃんは1人で元気に小学校に通えるようになったためカウンセリングは終了しました。深い心の傷を負った子どもの治療は難しく、専門家、ソーシャルワーカーなどが時間をかけて丁寧に関わっていくことで、徐々に心を開き心の傷を乗り越えていくことができるようになります。

日々困難な状況に向き合う大人の悩みも深刻です。FGCでは大人対象の個人カウンセリングは現在のところ行っていませんが、子どもの治療には保護者の気づきと協力が不可欠であるため、母

親のグループセラピーを開いています。

● DVと向き合う

家庭内暴力に苦しむ母親ワークショップの参加者ファーランさんは、シリアで夫が行方不明になった後、レバノンにいる夫の家族の元へ避難してきました。しかし大人数が住む狭い住居のためストレスが絶えず、夫の家族から子どもがうるさいので静かにさせるようにと四六時中言われているうちに、子どもを殴ることが止められなくなりました。臨床心理士は「自分のための時間を2日に一回取ること」と、「子どものための時間を取って一緒に何かすること」の2つの宿題を出しました。ファーランさんは「自分のために10分間読書をする時間を取り、心に安らぎを少し感じました。でも子どものための時間を取って遊んであげることがつらくてできなかった」ときつい眼差しで語りました。専門家のアドバイスを一言も聞き漏らすまいとする表情から、切羽詰まっている様子が感じられました。他のお母さんたちも夫からの暴力等つらい心境を吐露しお互いに分かち合います。

その後、お母さんたちは用意されたマットの上に横になりました。深く腹式呼吸を繰り返し、専門家のガイダンスに従って自己に対する許し、他者に対する許しの感情を徐々に味わっていきます。セッションの終了後、ファーランさんの顔は水浴びしてきたばかりのようにすっきりと輝いていました。「ほっとしてとても安心した気持ちになりました。こういう時間を持つことを、ずっと望んでいたことがわかりました」。家に帰れば過酷な試練が待ち受けている。そんなお母さんたちにとって、たとえ短時間であっても自分の痛む心を抱きしめいたわる時間を持つことで、少しずつ子どもたちに向き合えるように変わっていくのです。

レバノンのパレスチナ人・シリア人の苦境はほとんど知られていません。継続したご支援を切にお願いいたします。